国際シンポジウム総括報告

山﨑　雅稔

國學院大學古事記学センター主催の平成三〇年度の国際シンポジウムは、宮崎県西都原市において「古事記と『国家』の形成―古代史と考古学の視点から―」をテーマに開催された。シンポジウムの概要は以下のとおりである。

〔主催〕國學院大學古事記学センター
〔共催〕宮崎県
〔後援〕西都市、宮崎県神社庁
〔日時〕二〇一八年一一月三日（土）一三時～一七時
〔会場〕宮崎県立西都原考古博物館一階ホール（西都原市大字三宅字西都原西五六七〇番）
〔パネリスト及び演題〕
谷口雅博（國學院大學文学部教授、古事記学センター長）
「『古事記』と国家の形成」

サイモン・ケイナー（イギリス・セインズベリー日本藝術研究所総括役所長）
「考古学と神話の間―最近の発掘調査の成果から見た英国の国家形成―」
笹生衛（國學院大學神道文化学部教授、國學院大學博物館長）
「国家形成と鏡・刀剣―宝鏡・神剣の原形と歴史的展開―」
佐藤長門（國學院大學文学部教授）
「古代国家の形成と修史事業」

〔コメンテーター〕
李永植（韓国・仁済大学校歴史考古学科教授、仁済大学校博物館長）
「九州南部の天孫降臨神話と加耶」

〔ディスカッサント〕
長友安隆（青島神社宮司）

〔ディスカッション司会〕
山﨑雅稔（國學院大學文学部准教授）

〔総合司会〕
渡邉卓（國學院大學研究開発推進機構助教）

開催にあたっては準備段階から、共催者の宮崎県庁、後援者の西都市・宮崎県神社庁より多大なご協力を賜った。

また、宮崎県神社庁長の本部雅裕氏、青島神社宮司の長友安隆氏、宮崎県立看護大学看護学部教授の大館真晴氏には県内各機関との連絡・調整にご尽力頂いた。この場をかりて心より感謝の意を申し上げたい。

さて、今回の国際シンポジウムは、『古事記』を糸口に日本列島における古代国家の形成に光をあてようとしたものである。パネリストの顔ぶれに示されるように、そこには二つの課題に対するアプローチが企図されている。ひとつは文学研究の手法によって進められてきた『古事記』の分析・解釈と、最新の考古学・歴史学の研究成果の接点を模索することであり、もうひとつは古代における歴史語りのはじまりを東西ユーラシア史の視座から俯瞰することである。

歴史学は戦後長らく記紀神話と正面から向き合ってこなかった。記紀は近代国家を支えるイデオロギーとして利用された。これを学問的側面から支えたのが歴史学であった。神話学との距離をおいてきたのはその反省によるところが大きい。しかしこの間、記紀のテクストに対する精緻な分析が進み、他方で考古学の研究成果も蓄積されて文献資料の乏しい七世紀以前の歴史が明らかになってきた。こうしたなかで文学と歴史学の領野を越えて『古事記』を史資料として扱い、「倭」から「日本」へと化成していく列島社会の史的ダイナミズムの一端を考察できるようになった。最初に登壇した谷口雅博氏は、古代国家の成立史の視点から『古事記』を理解する際、そこに描かれた天地開闢・天孫降臨にはじまる王化の歴史、国家の成り立ち、史書成立の背景が問題になることを指摘したが、これは文学と歴史学・考古学の接点を端的に捉えたものである。

この問題提起に対して、文献史学の立場から佐藤長門氏、考古学の立場から笹生衛氏が応答した。佐藤氏は、壬申の乱に勝利して政権を奪った天武天皇がみずからの支配の正当性を歴史に求めるべく記紀の編纂を推進したこと、また、

持統女帝から孫の文武天皇、元明女帝から孫の聖武天皇へという皇位継承がアマテラスの孫ニニギノミコトが地上の支配者となった神話と重ねられ、現実的課題のもとで神話の承認が要請されるなか、記紀が完成をみたことを指摘した。一方、笹生氏は、記紀にも登場する鏡や剣の宗教的意味を、描かれた図像や刻まれた文字の解釈を通して明らかにし、ヤマト王権が対外交渉によってそれらを入手し、各地域の首長に分配するという流れが、列島内の諸勢力の統合上重要な機能を担っていたとした。鏡や剣は中国の先進文物であると同時に王化の象徴物であった。そのことは中国文明の外縁に位置する日本列島において、古代国家の形成が中国文明の受容を一つの契機として、その影響を多分に受けながら進んだことを示唆している。

シンポジウム当日に谷口・佐藤・笹生各氏が問題提起した内容については、本誌掲載の講演録・論文を参照して頂くとして、以下に簡単ではあるが、サイモン・ケイナー氏の報告と李永植氏のコメントについて、筆者の責任において内容を補足しつつ紹介しておきたい。両氏の報告・コメントは、『古事記』の誕生を文明史な観点から考える際の貴重なヒントがいくつも含まれていて大変刺激的なものであったが、本誌の刊行スケジュールの都合により掲載を見送った次第である。

まず、サイモン・ケイナー氏の報告は、イギリス、ブリテン諸島の国家形成を考古学の成果に基づいて捉えようとしたものである。ティンタジェル城、グラストンベリー・トー、サットン・フーを取り上げ、神話・伝説とのかかわりを論じている。イギリスは、カエサルの侵攻を経て紀元後一世紀にローマ帝国の属州となったが、ゲルマン人の大移動を背景にローマが弱体化すると、皇帝ホノリウスによりブリタニアの支配は放棄された。四一〇年の出来事である。この五世紀初頭には、グレートブリテン島の南部～中部地域に新しく入ってきたゲルマン系のアングロ・サクソン

人によって七王国をはじめとする小国家群が勃興した。八世紀末以降、ヴァイキングの活動が活発になるとその度重なる侵攻を受け、一一世紀初頭にはカヌート王の築いた北海帝国に組み込まれることになる。そして一一世紀後半、ヘイスティングの戦いに勝利したノルマンディ公ギヨーム二世（ウィリアム一世）によってノルマン朝が開かれるに至る。このような歴史のなかで、イギリスには大陸の慣習や法、キリスト教がもたらされ、歴史も書かれるようになった。ギルダスの著作でアーサー王の伝説を残した『ブリトン人の没落』（六世紀）、ビードによる『イングランド教会史』（八世紀前半）、アルフレッド大王のもとで編纂され、古英語で書かれた『アングロ・サクソン年代記』（九世紀後半）などがそれにあたる。一二世紀前半にジェフリー・オブ・モンマスがサクソン時代の歴史や物語を集めて著した『ブリタニア列王伝』を含め、これらの記録は後世の歴史観にも大きな影響を与えた。

ところが、考古学的な調査によって発見された遺跡や遺物は、かならずしも文字に残された歴史・神話と重なり合うものではないようだ。例えば有名なアーサー王の伝説に関連して、その居城とされるキャメロット城はイギリス西南部のコーンウォールにあるティンタジェル城に比定される。ティンタジェル城は、最近の調査によって一二世紀に発生した火災のあとに再建されたこと、最も古い遺構は五世紀から七世紀にさかのぼることが判明している。すなわち、五世紀後半から六世紀前半の王とされるアーサー王の時代の所産と考えられる。ただし、出土する遺物はフランス、スペインなどから運ばれてきた金属製品やグラスなどであり、地理的条件を反映して大陸諸地域との交流が盛んであったことも分かってきたのである。かりにティンタジェル城をキャメロット城に比定するならば、アーサー王の伝説はイギリスの〝伝統〟をまとったものではなく、むしろヨーロッパ的な要素を持ち合わせて成立したとみなければならない。

モンマスの記録によれば、アーサー王と妻グィネヴィアの埋葬地は、イギリスで最初に建てられたキリスト教会があったというグラストンベリーであったとされる。グラストンベリーには大きな修道院址があり、一九三九年、第二次世界大戦の直前に発掘調査が行われた際、アーサー王の墓が発見されて注目された。ところが、近年再調査が実施され、六～七世紀の建物址が見つかったものの、肝心の同時期の教会はなく、最も古い教会でも一〇世紀に初めて建てられたことが判明した。その一方で各地でこれより教会が見つかるようになり、アーサー王の墓の所在地に関しても再考の余地が生じている。

サフォーク州で見つかったサットン・フーの船葬墓は、大英博物館に展示される豪華な副葬品（武器や鉄兜、盾、グラス、金銀の装飾品、硬貨など）が出土し、ギルダスやモンマスが記すイースト・アングリア王レッドウォールド（六二七年没）を被葬者とする説がある。近年、その周辺から新しく遺跡が発見された。それは同時代の大規模なマーケットや裁判所などであり、この地域のサクソン人が築いた最初の国家を彷彿とさせるものである。レッドウォールドによるキリスト教への改宗とかかわりを示唆する装飾品も出土した。このように考古学の再調査により、イギリスの国家形成を考えるうえで鍵となるアングロ・サクソン時代の歴史は、伝説のなかで語り継がれてきたイメージを越えて、徐々に新しい解釈が可能になりつつあるという。

つぎに李永植氏は、加耶地域と九州南部の神話の類縁性を糸口に、具体的な出土例を紹介しながら両地域の交流の諸相について論じた。加耶は朝鮮半島の南部に位置する。加羅とも呼ばれ、四世紀から六世紀にかけて洛東江の中下流域を中心に金官加耶、大加耶、小加耶、阿羅加耶などの小国群が勃興し、玄界灘を挟んで向かい合う倭の勢力とも交流した。金海を根拠地とした金官加耶の建国神話は、『三国遺事』所引の「駕洛国記」に伝えられる。それによれば、

始祖の首露王は天から降ってきた金の卵から生まれたとされる。卵生神話は古朝鮮や高句麗・新羅の始祖神話にもみられる要素であり、始祖が天から降臨したとするのは日本の天孫降臨の神話と重なる。金の卵は六つあり、それらは「亀旨峰（クジボン）」に降臨した。一方、ニニギノミコトは筑紫の高千穂の「久士布流多気（クシフルタケ）」に降臨した。亀旨峰は金官加耶の中心地とされる鳳凰台遺跡に隣接する小高い丘地に比定されるが、「亀旨」と「久士」、二つの降臨の地はその呼称や景観に共通点を見出すことができるという。アマテラスがニニギノミコトに授けた三種の神器に関連して、多鈕細文鏡、細形銅剣、勾玉が出土した吉武高木遺跡三号木棺墓（福岡市）が注目されるが、韓国でも大田市付近の古墳で同じ組み合わせの副葬品が出土している。あるいは、六世紀の倭王権において対外政策を担い、加耶とも関わりを持った大伴氏はニニギノミコトとともに地上に降りた天忍日命の末裔とされる。

日向国（宮崎県）の加耶とのつながりは、土器や胡籙、垂飾付耳飾、移動式のカマド、雲珠などの馬具や馬を飼育した牧の遺構に見ることができる。高鍋町の持田二六号墳、国富町の本庄古墳から出土した三葉環頭大刀は、大加耶の故地とされる慶尚北道の高霊池山洞古墳四五号墳出土からも出土している。えびの市の島内地下式横穴墓群第一三九号墓では副葬品として納められた甲冑や銀装円頭大刀、象嵌鍛冶具などが出土したが、このうち兜は高霊池山洞古墳三二号墳の副葬品（日本製）などと類似し、大刀も加耶製か百済製と考えられる。李永植氏は、これらの事例から浮かび上がってくる両地域の直接・間接的な交流の歴史、それを背景に形成された神話との関係をどう考えるかが問題となることを指摘した。

ディスカッションでは、まず長友安隆氏にコメントを頂いた。長友氏は、県下の国学者による山陵研究の機運や京都帝国大学の濱田耕作らによる西都原古墳群の発掘調査の意義にふれつつ、古事記学が宮崎の地で脈々と受け継がれて

きたことを紹介された。その後、史書編纂の背景をいかに捉えるかという点に論点を絞って、登壇した五氏と意見交換を行った。ここではその中身に詳しくふれないが、日本で時を同じくして完成した史書が神話や系譜関係を強く意識した『古事記』と新しい国号「日本」を冠して国外を強く意識した『日本書紀』の二書であったことが物語るように、史書編纂は対内的には神話・歴史を共有して支配の正当性や共同体意識のありかを求める営みであり、その歴史意識は先進文明との接触や新たな国際秩序への参画、戦争などの国際的契機を土壌として培われたものである。笹生氏は、日本においては中国王朝との接触、ブリテン諸島においてはローマ帝国やキリスト教との接触がその形成の契機であったことが見通されることを指摘した。それは両地域に限られた問題ではない。おそらく他の地域に目を向けても同じような事情を見取ることができるだろう。異文化との交流は諸制度の充実や王権の誕生を促し、社会統合を前進させ、国家の形成を準備したが、それを考古学的にみれば景観の変容として表出する。サイモン・ケイナー氏はこの点についても目配りすべきことを強調した。史書がどのような歴史を選びとり叙述したのか、詳密な研究が求められるが、あわせて諸分野の新しい研究をふまえて複数の視点から史書に新しい光を当てることで、その歴史的意義を人類史のなかで考えることが可能になるだろう。イギリスと韓国を代表する二人の研究者を招聘して、神話の舞台にもなった宮崎で開催された今回のシンポジウムが古事記学の奥行きを広げる一助となれば幸いである。